

厚生労働省科学研究費補助金

政策科学総合研究事業

(政策科学推進研究事業)

F-SOAIP を用いた特別な支援の必要な保護者対応の記録システム

令和3年度 総括研究報告書

研究代表者 上田敏丈

令和4年(2022年) 3月

## 目次

### I. 総括研究報告

F-SOAIP を用いた特別な支援の必要な保護者対応の記録システム ----- 1

### II. 分担研究報告

1. 保護者支援における保育士の抱える困難感のフェーズを探る -----7

2. 保育士の感じる保護者支援の関係構築プロセス -----9

3. 保育所を利用する保護者が感じる保育士への相談調査 -----19

4. F-SOAIP を用いた記録システム(パイロット版) -----23

### III. 資料

1. 保護者支援における保育士の抱える困難感のフェーズを探る

2. 保育の記録における F-SOAIP 援用の有用性の検討

### III. 研究成果の刊行に関する一覧表

厚生労働省科学研究費補助金（政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業））  
総括研究報告書

F-SOAIP を用いた特別な支援の必要な保護者対応の記録システム

研究代表者 上田敏丈  
名古屋市立大学 大学院人間文化研究科 教授

研究要旨

本研究は、保育所において、特別な支援や配慮の必要な保護者への対応を保育士が行う上で、①どのような支援プロセスによって適切な子育て環境構築が可能となったのか、②保育所内での他保育士及び他職種間と保護者に関する情報共有のツール開発、③ ①②の知見を踏まえて、F-SOAIP による保護者対応の記録の蓄積と活用の実態調査という目的を検討する。研究全体の目的と年度の計画は図1の通りである。

令和3(2021)年度では、①保育士と保護者との子育て支援関係の先行研究のレビューを行い、②保育士がどのような支援を行うことで、適切な子育て環境構築が可能となったか、そのプロセスをインタビュー調査から明らかにするとともに、③保護者側が感じる園への相談内容やしやすさ、不安などをアンケート調査から明らかにした。また、④F-SOAIP を保育の記録に用いる際の有用性を検討し、⑤F-SOAIP の記録システム（パイロット版）を作成した。

その結果、保育士及び保護者へのアンケート調査から概ね両者の相談については、適切な関係性が構築されており、80%以上の保護者が丁寧な対応に満足していることである。しかしながら、一部のケースについて、相談しにくいことや相談しても問題が解決していなかった。そのために、配慮や支援の必要な保護者への支援プロセスとして、初期・中期・後期という3期によって、異なる対応が必要となることが示唆された。今後、園内での情報共有が必要である。アンケート調査から、このような事例に対しても、記録をとっていなかったり、とっていても、十分に活用していないことが明らかになった。従って、検索・活用のできる記録システムが求められるだろう。

本研究ではそのために、記録のポイントを押さえることのできる F-SOAIP に基づく記録システムを開発した。これらの記録システムを活用し効果検証すること、及び、本年度の成果から、このシステムに、外部専門機関との連携及び活用ができる枠組みを組み入れていくことが今後の課題となる。

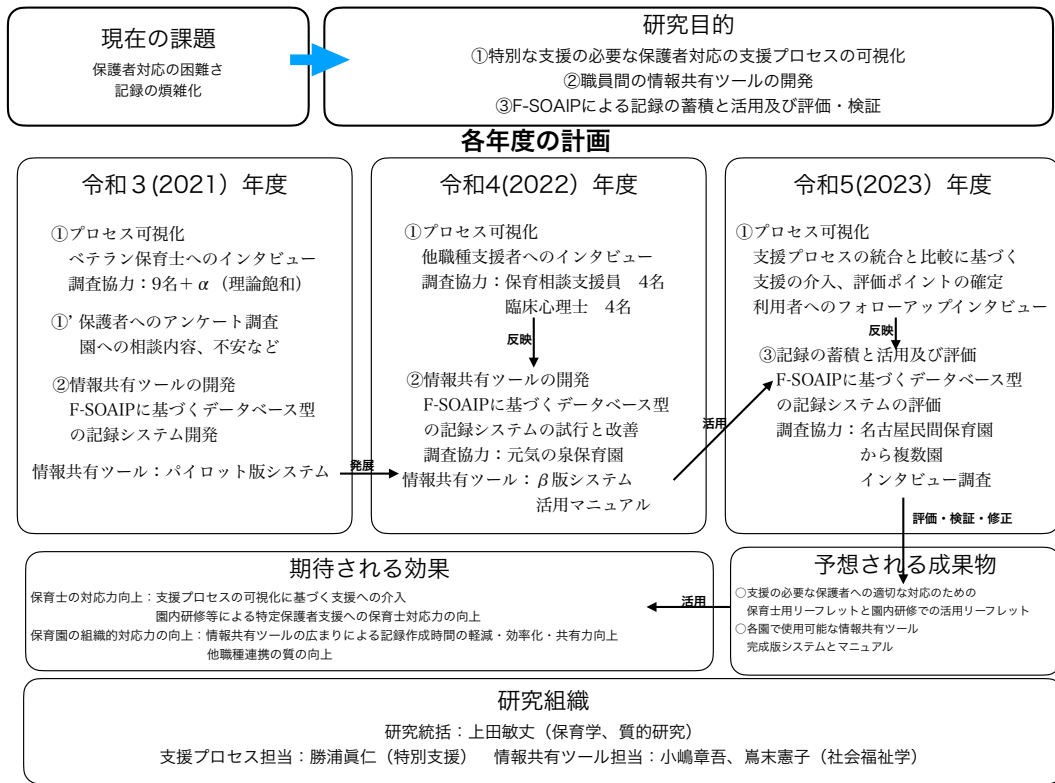


図1 本研究の調査概要と年度の計画

研究分担者
桜花学園大学 保育学部
准教授 勝浦眞仁
国際医療福祉大学 医療福祉学部
教授 小嶋章吾
埼玉県立大学 保健医療福祉学部
准教授 畠末憲子
研究協力者
大倉山元気の泉保育園
園長 中村聖子

### A.研究目的

本研究は、保育所において、特に配慮や支援の必要な保護者への対応を保育士が行う上で、どのような支援体制の構築が可能となるのかを明らかにすることが目的である。

保護者への支援について、保育士の役割が大きくなことはこれまでも重要視されてきたが、一方でそれに対する保育士の困難感については、これまでの先行研究においても報告されてきた。例えば、保育者が保護者支援で感じる困難を「保護者自身に起因する困難感」「保育者自身に起因する困難感」「関係性に起因する困難感」があることを明らかにされている(岸本・武藤 2019)。保護者にどのように接すればよいのか、どうすれば過不足なく支援できるのかということは保育士の大きな関心事項であり、関連する書籍も多数出版されている(例えば、西館・徳田 2014 など)。そして、このような困難さが保育士としての離職につながっていることも想定されよう。

従って、配慮や支援の必要な保護者に対して、どのように保育士が対応し、支援プロ

セスを構築しているのか、また課題はどこにあり、どのような組織的体制の構築が可能であるのかを明らかにすることが喫緊の課題である。

そのために、特に本年度は、次の具体的な課題を明らかにする。

- (1) 保護者支援に対して保育士の抱える困難感はどのようなものがあるのかを文献研究から明らかにする(分担報告1、資料1)。
- (2) 保育士の行う保護者支援プロセスをアンケート及びインタビュー調査から明らかにする(分担報告2)。また、保護者の視点から保育所や保育士への相談についての調査を行う(分担報告3)。
- (3) 配慮や支援の必要な保護者の情報を共有するツール(パイロット版)を作成する(分担報告4、資料2)。

## B.研究方法

本研究を行うにあたり、インタビュー・アンケート調査については、研究者間で項目の精選・確認を行い、筆頭著者の所属する大学において、倫理審査委員会の承認を得ている。また、実際に調査を行う際には、牌畏怖先の所属機関との事前協議の上、内諾を頂き、拒否・無回答しても何の不利益もないことを確認した上で、依頼を行った。インタビュー調査については、事前に研究内容の説明を行い、書面にて同意を得た。

個別の研究協力者の概要については、分担報告書等に記載されている。

## C.研究結果

### (1)保護者支援に対する保育士の抱える困難感に関する文献レビュー

保護者支援における保育士の困難感を文

献研究から理論的に探究する基礎的研究として、保育士と保護者との関係性の変容という観点から、保育士の困難感のフェーズを明らかにしていくことを目指した。その結果、関係構築期には、「保護者および保育士の特徴・性格に起因する躓き」および「保育士が保護者に子どもの姿を伝達することに伴う難しさ」、関係葛藤期には、「保育および子どもに関する相互理解がすれ違ってしまふことによる困難感」および「子どもの最善の利益と保護者の意思尊重との板挟みによる困難感」、関係困難期には、「保護者からの信頼感が失われてしまった状況」という3つのフェーズにおける保育士の困難感の仮説モデルを提唱した。各フェーズにおいて生きる保育士の専門性として、「コミュニケーション」、「相互理解」と「子どもの最善の利益」「ソーシャルワーク」をそれぞれ挙げたが、十分に発揮できていない状況がありうることを述べた。また、保護者との関係性によらないものの、「保育システム」および「社会背景」という保育士の困難感を生じさせる要因についても指摘した。

### (2)保育士の行う保護者支援プロセス

本調査では、保育士へのアンケート調査及びインタビュー調査を通して、配慮の必要な保護者への支援プロセスを可視化することで、支援に必要な特徴を明確にすることが目的であった。

アンケート調査からは、

- 1) 保護者の養育態度に課題がある場合と、保護者との何らかのやりとりの中で、保育士の対応や伝え方に問題があること
- 2) それが原因となり、保護者とのこじれた

関係性が長期化し話し合い回数も増えること

3)関係性が解決にいたるには長期に渡ること解決したと感じた場合でも時間の経過による消極的な解決の場合が多く、解決に至らないことも2割程度あること

という3点が明らかとなり、それらを踏まえたインタビュー調査からは、保護者と保育士の齟齬が認識のずれを生み出し、それが長期化するプロセスが明らかになった。

以上のことから、以下の示唆が得られた。第一に、保育士と保護者との齟齬が生じた場合の最初の対応を丁寧に行うことが必要である。

第二に、長期化に至ると、肯定的な関係構築に基づく解決もあるが、そうではない消極的な関係構築に基づく解決や未解決となることも約20%程度ある。これらの事例は少数となるが、これが保育士へのストレスを高め退職に向かわせることとなるため、組織的な対応や外部との連携による支援が必要である。

また、保護者に対するアンケート調査から、保護者の保育士への相談については、おおむね保育所や保育士が適切に対応しており、80%以上が相談しやすく、その問題が解決されている、と感じていることが明らかになった。しかしながら、相談しにくいと感じたり、相談した内容が解消されていないと感じている人が、1-2割いることから、これらの層に対して、適切に対応していくことが肝要であろう。

### (3)配慮や支援の必要な保護者の情報を共有するツール(パイロット版)の作成

本研究は、配慮や支援の必要な保護者の情報を共有するツール(パイロット版)を作成することである。

そのために、

- 1)F-SOAIPを保育記録へ援用し有用性を検討すること(詳細は別紙資料)
  - 2)具体的データベースの構築すること
- という2点を行った。

#### 1)保育記録への有用性の検討

本研究により、保育の記録にF-SOAIPを援用する有用性として、①項目による書きやすさ・教えやすさ、②実践の変化につながる「保育の循環的な過程」の意識化保育の循環的な過程のやりやすさ、③意図や願いを共有するという記録の意義の再認識の3点が明らかになった。

#### 2)F-SOAIPを用いた記録システムの作成

F-SOAIPに基づく記録システムの開発を行った。

研究目的1)からF-SOAIPの概念を保育記録に援用することで有用性が明らかになった。また、1)で得られた知見から、2)のF-SOAIPに基づく記録システムの開発を行うことができた。

今後、データを入力し、それぞれの園で活用した事例を元に、より効果的なシステム(β版)としたい。

#### D.考察

本年度の調査から、配慮や支援の必要な保護者への保護者支援について次のことが明らかになった。

保育士及び保護者へのアンケート調査から概ね両者の相談については、適切な関係性が構築されており、80%以上の保護者が丁寧な対応に満足していることである。しかしながら、一部のケースについて、相談しにくいことや相談しても問題が解決していないことがある。

このような時、特に初期段階での対応や伝え方で認識のずれが生じたとき、保育士が支援の困難さを感じる事例が生じることとなった。保育士が支援に困難さを感じる事例では、長期化・複雑化してしまうことがあり、そのような場合、保育士への負担感が高く、離職を意識することへとつながってしまう。また、このような事例は、肯定的な関係性に基づき解決されないことも多く、時間経過による消極的解決や未解決感が残ることも、保育士にとって自己充実感を妨げることとなる。

そのために、配慮や支援の必要な保護者への支援プロセスとして、初期・中期・後期という3期によって、異なる対応が必要となることが示唆された。

認識のずれが生じる初期段階においては、まずずれを生じさせないような適切な対応が求められ、生じた場合も、丁寧な対応により保護者関係を構築することが大事である。

認識のずれが生じたまま、長期化していくことが見込まれる際には、組織的な対応として、情報を共有しつつ、一元化した対応が求められる。

長期化・複雑化した場合は、各種専門機関

との連携が求められる。特に高ストレス化にさらされる対応保育士にとっては、他者からの支援アドバイスが必要であろう。

そのためには、まず園内での情報共有が必要である。アンケート調査から、このような事例に対しても、記録をとっていなかったり、とっていても、十分に活用していないことが明らかになった。従って、検索・活用のできる記録システムが求められるだろう。

#### E.結論

本研究ではそのために、記録のポイントを押さえることのできる F-SOAP に基づく記録システムを開発した。これらの記録システムを活用し効果検証すること、及び、本年度の成果から、このシステムに、外部専門機関との連携及び活用ができる枠組みを組み入れていくことが今後の課題となる。

#### 引用文献

岸本美紀・武藤久枝（2019）保育者が保護者支援で抱える困難感の内容と構造—先行研究の分析結果から—。岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要 52, 39–46.

西館有沙・徳田克己（2014）配慮の必要な保護者への支援。Gakken.

#### F.健康危険情報

該当なし

## G.研究発表

### 1. 論文発表

勝浦 眞仁・上田 敏丈 (2021). 保護者支援における保育士の抱える困難感のフェーズを探る-保育士による保護者支援のための文献研究. 桜花学園大学保育学部研究紀要, 24, 35-50. Retrieved from <https://cir.nii.ac.jp/crid/1050573243253766144>.

中村 聖子・上田 敏丈 (2021). 保育の記録における F-SOAIP 援用の有用性の検討. 質的心理学研究, 20(Special), S22-S28. [https://doi.org/10.24525/jaqp.20.Special\\_S22](https://doi.org/10.24525/jaqp.20.Special_S22).

### 2. 学会発表

なし

## H.知的財産権の出願・登録状況

該当なし



厚生労働省科学研究費補助金（政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業））  
分担研究報告書

保護者支援における保育士の抱える困難感のフェーズを探る

分担研究者 勝浦真仁 桜花学園大学 保育学部 准教授

研究代表者 上田敏丈 名古屋市立大学 大学院人間文化研究科 教授

研究要旨

保護者支援における保育士の困難感を文献研究から理論的に探究する基礎的研究として、保育士と保護者との関係性の変容という観点から、保育士の困難感のフェーズを明らかにしていくことを目指した。その結果、関係構築期には、「保護者および保育士の特徴・性格に起因する躓き」および「保育士が保護者に子どもの姿を伝達することに伴う難しさ」、関係葛藤期には、「保育および子どもに関する相互理解がすれ違ってしまうことによる困難感」および「子どもの最善の利益と保護者の意思尊重との板挟みによる困難感」、関係困難期には、「保護者からの信頼感が失われてしまった状況」という3つのフェーズにおける保育士の困難感の仮説モデルを提唱した。各フェーズにおいて活きる保育士の専門性として、「コミュニケーション」、「相互理解」と「子どもの最善の利益」「ソーシャルワーク」をそれぞれ挙げたが、十分に発揮できていない状況がありうることを述べた。また、保護者との関係性によらないものの、「保育システム」および「社会背景」という保育士の困難感を生じさせる要因についても指摘した。

A.研究目的

保育士と保護者との関係性の変容という観点から、保護者支援における保育士の抱える困難感のフェーズを明らかにし、その変容モデルを提示することを目的とした。

これにより、タイミングのよい保育士のサポートを提供することが可能となり、保育士の抱える困難感が多少なりとも和らげられることにつながるという意義があった。

B.研究方法

保護者支援における保育士の困難感を文献研究から探究した。

先行研究において提示されていた、保護

者支援における保育士の困難感に関する項目や記述を合計119項目抽出した。それらを「関係構築期」、「関係葛藤期」、「関係困難期」の3つのフェーズに分類した。

C.研究結果

「関係構築期」では、「保護者および保育士の特徴・性格に起因する躓き」および「保育士が保護者に子どもの姿を伝達することに伴う難しさ」を述べた。

「関係葛藤期」では、「保育および子どもに関する相互理解がすれ違ってしまうことによる困難感」および「子どもの最善の利益と保護者の意思尊重との板挟みによる困難

感」を指摘した。

「関係困難期」では、「保護者からの信頼感が失われてしまった状況」が生じることを述べた。

#### D. 考察

「関係困難期」に至るまでには、それまでの保育士と保護者とのかかわりの積み重ねによるところがあると考えられることから、現時点においては、各フェーズは固定化されたものとしてではなく、連続するものとして描くこととした。

実際、見出された困難感それぞれとの間で、関連性のある場合もあったことから、保育士と保護者との関係性が変容していく動態として、各フェーズにおける保育士の困難感を明らかにし、モデル化することができた。

また、各フェーズにおいて生きる保育士の専門性として、「コミュニケーション」、「相互理解」と「子どもの最善の利益」「ソーシャルワーク」をそれぞれ挙げたが、十分に発揮できていない状況がありうることを述べた。

#### E. 結論

保育士が保護者との関係について感じている難しさについて詳細に検討することができたとともに、肯定的な変容としてではなく、より厳しい状況へと変容していくモデルを図1のように示すことができた。

このモデルをベースとすることで、フェーズ毎に生じると考えられる保護者支援における保育士の困難感に適したサポートを提供できることにつながっていくとともに、新たな保護者支援のあり方を検討していく

足掛かりとなった。

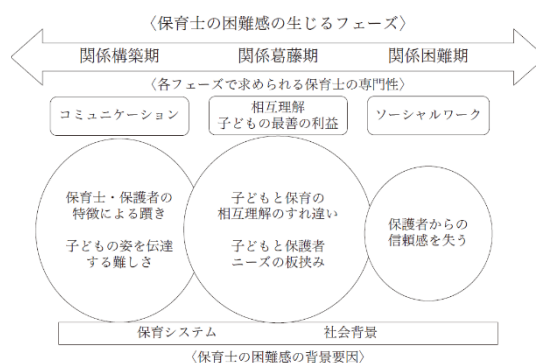


図1：保護者支援における各フェーズにおいて保育士の抱える困難感とその背景

付記

桜花学園大学保育学部紀要第24巻, 35-50

厚生労働省科学研究費補助金（政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業））  
分担研究報告書

保育士の行う保護者支援の関係構築プロセス

研究代表者 上田敏丈 名古屋市立大学 大学院人間文化研究科 教授  
分担研究者 勝浦真仁 桜花学園大学 保育学部 准教授

研究要旨

本調査では、保育士へのアンケート調査及びインタビュー調査を通して、配慮の必要な保護者への支援プロセスを可視化することで、支援に必要な特徴を明確にすることが目的である。そのために、アンケート及びインタビュー調査を行った。

アンケート調査は、2022年2月～2022年4月まで実施された。協力者は、206名である。インタビュー調査は、2022年2月～2022年4月で実施され、協力者は9名である。アンケート調査の結果から、

- (1)保護者の養育態度に課題がある場合と、保護者との何らかのやりとりの中で、保育士の対応や伝え方に問題があること
- (2)それが原因となり、保護者とのこじれた関係性が長期化し話し合い回数も増えること
- (3)関係性が解決にいたるには長期に渡ること解決したと感じた場合でも時間の経過による消極的な解決の場合が多く、解決に至らないことも2割程度あること

という3点が明らかとなった。また、それらを踏まえたインタビュー調査からは、保護者と保育士の齟齬が認識のずれを生み出し、それが長期化するプロセスが明らかになった。

配慮や支援の必要な保護者への保護者支援は、多くの保育士にとって長いキャリアの中での数少ない事例である。しかしながら、そのような場合で困難さを感じるような状況となった場合、対応の長期化や保育士への高いストレスが見込まれ、負担となる。このような長期化・高ストレス化させないためには、初期段階における丁寧な対応、中期段階における組織的対応、後期段階における外部連携対応といったものが必要となる。

研究協力者 中村聖子（大倉山元気の泉保育園）

**A.研究目的**

保育士は子どもとの関わりを重要と考え職業選択をしている。しかしながら、実際に離職の理由としては、保護者対応を含めた

人間関係によることが多い（赤塚・祐宜, 2020）。保護者対応に対して保育士が困難感を抱えている研究は多数あり（岸本・武藤, 2019; 岩切・若宮, 2020 など）、具体的な場

面でどのように対応しているのかの研究は散見される。例えば、連絡帳を通した子育て支援のあり方（伊藤，2017）、保育士の共感的対応（高橋，2015）などである。しかし、これらの保護者支援がどのようなプロセスで適切な形となり得たのかは十分に明らかになっていない。そこで、保育士へのアンケート調査及びインタビュー調査を通して、配慮の必要な保護者への支援プロセスを複雑径路・等至性アプローチ（安田・サトウ2017）によって可視化することで、支援に必要な特徴を明確にする。

## B.研究方法

### 1) アンケート調査について

アンケートは、2022年2月～2022年4月まで実施された。アンケート協力者は、A県の複数市町村の当該部局に依頼を行い、各保育所に配布をしてもらった。アンケートは、書面で研究目的を伝えた上で、回答は自由であること、不利益のないことを伝えて回答してもらった。協力者は、206名である。

アンケートの内容大きく次の4つである。

①フェースシート、②保護者支援において最も困難さを感じた事例、③2番目に困難さを感じた事例、④情報の共有方法について、である。

### 2) インタビュー調査について

インタビューは、2022年2月～2022年4月まで実施された。インタビュー協力者は、スノーボール方式で依頼をした。研究の目的を伝えた上で、協力が可能かどうかを確認し、書面にて同意を得た。協力者は9名

である。

インタビューの内容は、保護者支援を行う上で困難であった事例について、背景や支援体制、その結果などについて聞き取りを行った。

インタビューの分析は、保育者が保護者支援において、困難さを感じ長期化した事例について、複雑径路・等至性モデリング（以下、TEM）を用いて分析を行った（安田・サトウ2017）。得られた語りから、保護者支援プロセスの特徴となる語りに対して、コーディングを行い、非可逆の時間によって径路の配置を行った。複数の事例から同様の手続きを行い、共通化される径路を構築していった（図1）。

## C.研究結果

### 1) アンケート調査の結果について

アンケートによる基礎集計は次の通りである。

#### ①回答者の属性（フェースシート）

本調査の協力者206名の属性は以下の通りである。概ね女性であり、年代は全体にわたっている。従って、保育経験も全体的にわたっているが、経験の長いベテラン保育士の数が多かった。

1-1性別					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
女性	185	89.81	185	90.69	90.69
男性	16	7.77	16	7.84	98.53
不問	3	1.46	3	1.47	100.00
欠損値	2	0.97			
合計	206	100	204	100	

1-2年齢					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
20代	25	12.14	25	12.32	12.32
30代	36	17.48	36	17.73	30.05
40代	56	27.18	56	27.59	57.64
50代	65	31.55	65	32.02	89.66
60代	19	9.22	19	9.36	99.01
70代以上	2	0.97	2	0.99	100.00
欠損値	3	1.46			
合計	206	100	203	100	

1-3保育経験					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
1-5年目	25	12.14	25	12.25	12.25
6-10年目	19	9.22	19	9.31	21.57
11-15年目	27	13.11	27	13.24	34.80
16-20年目	32	15.53	32	15.69	50.49
21-25年目	28	13.59	28	13.73	64.22
26年以上	73	35.44	73	35.78	100.00
欠損値	2	0.97			
合計	206	100	204	100	

勤務している園は、半数が公立保育所であり、約30%が私立保育所であった。また、約40%が現在所長の職務に就いている。

1-4園種					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
公立保育所	98	47.57	98	48.28	48.28
私立保育所	60	29.13	60	29.56	77.83
認定こども園	30	14.56	30	14.78	92.61
小規模保育所	7	3.40	7	3.45	96.06
認可外保育所	1	0.49	1	0.49	96.55
その他	7	3.40	7	3.45	100.00
欠損値	3	1.46			
合計	206	100	203	100	

1-6役職					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
所長	85	41.26	85	42.50	42.50
副所長	6	2.91	6	3.00	45.50
主任	30	14.56	30	15.00	60.50
乳児クラス	31	15.05	31	15.50	76.00
3歳クラス	11	5.34	11	5.50	81.50
4歳クラス	10	4.85	10	5.00	86.50
5歳クラス	10	4.85	10	5.00	91.50
補助・加配	4	1.94	4	2.00	93.50
その他	13	6.31	13	6.50	100.00
欠損値	6	2.91			
合計	206	100	200	100	

## ②最も困難さを感じた事例について

これまでの保育士の経験の中で、最も困

難さを感じた事例について尋ねた。その時にどれくらいの経験年数であったかについて、また、そのときの自身の役職については、キャリアの年数全体にわたった。

2-1事例時の経験年数					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
1-5年目	56	27.18	56	28.28	28.28
6-10年目	34	16.50	34	17.17	45.45
11-15年目	25	12.14	25	12.63	58.08
16-20年目	35	16.99	35	17.68	75.76
21-25年目	19	9.22	19	9.60	85.35
26年以上	29	14.08	29	14.65	100.00
欠損値	8	3.88			
合計	206	100	198	100	

2-2事例時役職					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
所長	38	18.45	38	19.39	19.39
副所長	7	3.40	7	3.57	22.96
主任	26	12.62	26	13.27	36.22
乳児クラス	27	13.11	27	13.78	50.00
3歳クラス	27	13.11	27	13.78	63.78
4歳クラス	36	17.48	36	18.37	82.14
5歳クラス	25	12.14	25	12.76	94.90
補助・加配	2	0.97	2	1.02	95.92
その他	8	3.88	8	4.08	100.00
欠損値	10	4.85			
合計	206	100	196	100	

最も困難さを感じた事例について、何が原因で起こったのか、については、保護者の養育態度の問題と答えたものが、約26%、保護者の伝え方・対応であったのが、約20%であり上位を占めている。

困難さを感じた事例については、その日や一週間で解決に至ったケースは、約15%であり、半年を超えるケースや現在も続いているものが、約30%、またその中には、解決していないという回答がほとんどであり、困難さを感じた事例は、保育士にとって、長期間にわたり、また解決しきれなかったことが多い。

2-4原因					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
子どもの問題	9	4.37	9	5.00	5.00
養育態度	54	26.21	54	30.00	35.00
自己中保護者	15	7.28	15	8.33	43.33
要求強保護者	17	8.25	17	9.44	52.78
保護者の問題	16	7.77	16	8.89	61.67
保護者同士の関係	4	1.94	4	2.22	63.89
保育士の問題	6	2.91	6	3.33	67.22
伝え方・対応	42	20.39	42	23.33	90.56
園内の要因	3	1.46	3	1.67	92.22
その他	14	6.80	14	7.78	100.00
欠損値	26	12.62			
合計	206	100	180	100	

2-8解決原因					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
話し合い	60	29.13	60	35.29	35.29
卒園・転園	39	18.93	39	22.94	58.24
時間	24	11.65	24	14.12	72.35
行政介入	14	6.80	14	8.24	80.59
カウンセラー介入	1	0.49	1	0.59	81.18
弁護士介入	20	9.71	20	11.76	92.94
その他	12	5.83	12	7.06	100.00
欠損値	36	17.48			
合計	206	100	170	100	

2-6解決期間					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
その日	11	5.34	11	5.67	5.67
一週間以内	20	9.71	20	10.31	15.98
一ヶ月以内	26	12.62	26	13.40	29.38
三ヶ月以内	9	4.37	9	4.64	34.02
半年以内	28	13.59	28	14.43	48.45
1年以上	35	16.99	35	18.04	66.49
継続	29	14.08	29	14.95	81.44
その他	36	17.48	36	18.56	100.00
欠損値	12	5.83			
合計	206	100	194	100	

話し合いの回数についても、1-3回で終了した事例が約30%であるのに対して、10回以上も約23%であり、双方にとって話し合いの負担も多いように思われる。

2-7話し合い回数					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
1-3回	62	30.10	62	33.33	33.33
4-6回	29	14.08	29	15.59	48.92
7-10回	13	6.31	13	6.99	55.91
10回以上	48	23.30	48	25.81	81.72
その他	34	16.50	34	18.28	100.00
欠損値	20	9.71			
合計	206	100	186	100	

このような事例について、話し合いで解決したと考えられるのが約30%であり、卒園・転園や時間の経過による時間的解決も約30%と多くを占めていた。

これらのことから、困難さを感じる事例については、長期化し、また解決についても、時間の経過という消極的な解決によることが推測される。

では、具体的に保育士が配慮や支援の必要な保護者との関係で感じる困難な事例について、具体的にどのようなものであったのかを自由記述から、代表的なものを抜粋する。特に原因として数が多かった保護者の養育態度に関する事例と、保護者への伝え方・対応に関する事例、保護者自身に支援の必要な事例を取り上げる。

### 養育態度に課題があると考えられる保護者の事例

○卒園式の形式など、1人の保護者の思いが強く、内容や形式を指定したり、他の保護者も巻き込み、要望を通そうとした。しかし、思いが通らない他の保護者に対して、仲間はずれにしたり、他の保護者の前で悪口を言ったり、保護者間のトラブルに繋がった。

○第三子の保護者で、以前の担任と現在の保育園・担任の対応の違いに納得がいかず、様々なことで意見を言ったり、無理な要求をすることがあって、担任が委縮してしまった。園長が間に入り、保護者の話を聞くことで、変化していった。

### 保護者への伝え方・対応に課題があると考えられる事例

○保育園で子どものパンツが紛失したとの訴えが母からあり、しかし職員が子どもが自分でビニール袋に入ったパンツを持って母の後を歩いていたことを見ていた。そのことを母に告げたら、嘘をついているというのか?と激怒された。

○Aくんは悪気なくすぐに手がでしてしまうため友達をけがさせてしまうことが何度もあった。園でうまくやれているかなど母親が気にしている姿があったため保育士と話をする場をもうけた。

○Aちゃんの保護者はほぼ毎日子育てに対しての質問があり、保育者に対しても好き嫌いがあり（好きな保育者に苦手な保育者の事を言う）保護者の支援はしたいが対応の仕方困っている。

### 保護者自身への支援が必要と考えられる事例

○Bちゃんはとても怖がり、クラスでの友だち関係も悩むことがありました。それについて、母親に相談し、母親から私に相談がありました。母親の心配性な性格もあり、何かあればすぐに面談を行うことでその都度解決がなされました。しかし、母親の過保護とも感じることもあり、そこについての支援や相談はなかなかできないままでした。

○A母親の精神不安から突然子どもを連れて家出をしたり、戻ってきたと思ったらすべての問題の根源を保育園のせいにするなど攻撃的になったりすることで3人の子どもが不安定になってしまっていた。

○保護者は10代で出産しており、2人目が生まれ私のクラスに預けることとなった。しかし、保護者自身が時間管理などが苦手な朝ごはんを食べられることができなかったり、

衣服の準備もできず保育園に預けている状態だった。家でも十分に子どもと関わる余裕がないためか、子どもは無表情で泣くこともなく、名前を呼んでも振り向かない。保護者もそれに気づくことなく、8ヶ月の時点で離乳食ではなくマクドナルドのポテトを食べさせていて、「何でも食べます」と自信をもって答えていたが子どもはすべて丸飲みしていて嘔吐することもできていなかった。

### ③2番目に困難さを感じた事例について

本調査では、困難さを感じた2番目の事例についても回答を得た。書いた王の全体的な傾向については、1番目のものと大きくかわりないため、記述統計のみ記す。

3-1事例時の経験年数					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
1-5年目	34	16.50	34	27.87	27.87
6-10年目	16	7.77	16	13.11	40.98
11-15年目	20	9.71	20	16.39	57.38
16-20年目	17	8.25	17	13.93	71.31
21-25年目	14	6.80	14	11.48	82.79
26年以上	21	10.19	21	17.21	100.00
欠損値	84	40.78			
合計	206	100	122	100	

3-2事例時役職					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
所長	30	14.56	30	25.42	25.42
副所長	2	0.97	2	1.69	27.12
主任	14	6.80	14	11.86	38.98
乳児クラス	22	10.68	22	18.64	57.63
3歳クラス	8	3.88	8	6.78	64.41
4歳クラス	20	9.71	20	16.95	81.36
5歳クラス	15	7.28	15	12.71	94.07
補助・加配	1	0.49	1	0.85	94.92
その他	6	2.91	6	5.08	100.00
欠損値	88	42.72			
合計	206	100	118	100	

3-4原因					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
子どもの問題	11	5.34	11	9.48	9.48
養育態度	25	12.14	25	21.55	31.03
自己中保護者	7	3.40	7	6.03	37.07
要求強保護者	3	1.46	3	2.59	39.66
保護者の問題	30	14.56	30	25.86	65.52
保護者同士の関係	5	2.43	5	4.31	69.83
保育士の問題	6	2.91	6	5.17	75.00
伝え方・対応	21	10.19	21	18.10	93.10
園内の要因	1	0.49	1	0.86	93.97
その他	7	3.40	7	6.03	100.00
欠損値	90	43.69			
合計	206	100	116	100	

また、紙媒体で記録を作成していても、閲覧しているのは、約16%であり、約40%は紙媒体を保存するにとどめているようである。

4-1子育て支援情報共有					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
共有していない	43	20.87	43	22.75	22.75
紙媒体	122	59.22	122	64.55	87.30
デジタル媒体	15	7.28	15	7.94	95.24
その他	9	4.37	9	4.76	100.00
欠損値	17	8.25			
合計	206	100	189	100	

3-6解決期間					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
その日	8	3.88	8	6.78	6.78
一週間以内	18	8.74	18	15.25	22.03
一ヶ月以内	9	4.37	9	7.63	29.66
三ヶ月以内	14	6.80	14	11.86	41.53
半年以内	15	7.28	15	12.71	54.24
1年以上	25	12.14	25	21.19	75.42
継続	16	7.77	16	13.56	88.98
その他	13	6.31	13	11.02	100.00
欠損値	88	42.72			
合計	206	100	118	100	

4-3共有媒体					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
紙媒体閲覧	34	16.50	34	24.82	24.82
紙媒体ファイル	83	40.29	83	60.58	85.40
デジタル閲覧	4	1.94	4	2.92	88.32
その他	16	7.77	16	11.68	100.00
欠損値	69	33.50			
合計	206	100	137	100	

3-7話し合い回数					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
1-3回	39	18.93	39	34.21	34.21
4-6回	21	10.19	21	18.42	52.63
7-10回	12	5.83	12	10.53	63.16
10回以上	28	13.59	28	24.56	87.72
その他	14	6.80	14	12.28	100.00
欠損値	92	44.66			
合計	206	100	114	100	

以上、保育士へのアンケート調査から、保育士が保護者支援において困難さを感じる事例として、

- (1)保護者の養育態度に課題がある場合と、保護者との何らかのやりとりの中で、保育士の対応や伝え方に問題があること、
  - (2)それが原因となり、保護者とのこじれた関係性が長期化し話し合い回数も増えること、
  - (3)関係性が解決にいたるには長期に渡ること解決したと感じた場合でも時間の経過による消極的な解決の場合が多く、解決に至らないことも2割程度あること、
- という3点が明らかになった。

#### ④情報共有について

保育士にとって困難さを感じる事例について、どのような形で情報共有を行っているのかを尋ねたところ、約60%は紙媒体での共有を行っている一方、約20%は、保育士間で共有を行っていなかった。

#### 2) インタビュー調査の結果について

保育士9名へのインタビューから、配慮や支援の必要な保護者に対応した中で、支



援に困難を感じ長期化した事例の語りを分析した。

図1は、左から右に支援プロセスの径路が4期にわたり記されている。以下、「径路」〈分岐点〉【至等点】として記している。

#### ①はじまり

支援プロセスのはじまりは、行事や園の方針、連絡事項による、「園から保護者への要望連絡」や「子どもの発達への懸念」から相談したり、詳細な要望をしたりなど「保護者から園への要望連絡」という保育所と保護者とのやりとりから始まる。

#### ②認識のずれ

その際に、保育所側が十分な意図を説明しないまま伝えたり、人づてで重要事項を伝えたりする「配慮のない伝え方」を行うことで、保護者側と保育所側との〈認識のずれ〉が生じてしまう。しかし、保育所が丁寧な伝え方をしているにも関わらず、ケースによっては、異なる捉えられ方をするなどして、認識のずれが生じることもあった。

この際、「話し合い等による認識のすりあわせ」を行い、合意形成されれば、相互の意見が合致し、問題状況とはならない。

しかしながら、最初に「かけちがえたボタン」になってしまうと、その状況が継続してしまい、お互いの意図がずれたまま、同じやりとりを繰り返す「ずれと要望のループ」状況となってしまう。

#### ③長期化

このような「ずれと要望のループ」状況は、長時間・長期間による話し合い、両者の関係性が不安定となる「不安定関係の長期化」となる。この中で、様々な「保育士のス

トレスとなる保護者の行動」が保育士にとっては負担となる。例えば、数時間にわたる相談や保護者からの批判や暴言、あるいは、園外での待ち伏せ等である。

多くの場合、このような長期化に至るケースは、保育士のキャリアからも少ないものである一方、その1回の事例から、「保育士の精神的不安増加」してしまい、保育士を退職するケースも複数、報告されている。

このような長期化した困難な保護者支援の事例にたいして、園としては、窓口を固定化し、対応可能な保育士による「個別対応」を行っている園もあった。だが、この方法は当該保育士への負担や、退職に伴い、組織的に不安定さが残るであろう。

一方、多くの園では、窓口を一本化することや、相互の職員同士でフォローすること、丁寧な対応が必要なケースへの情報共有を行うといった「組織的対応」によって対応している。

「組織的対応」を行うことで、丁寧な対応による問題の解決、保護者が理解してくれることによる問題の解決といった、保育所と保護者との「保護者支援の肯定的関係構築」がなされ、困難な保護者支援が収束する。だが、一方で、保護者と関係性を持たなくなる「保護者との没交渉」による没交渉解決や、保護者が他機関等を利用し、自己解決するなど、「保護者支援の消極的関係構築」のまま、収束することもある。

また、最終的に当該保育士が退職したり、当該保護者の子どもが転園・退園することで、関係構築ができないままの事例も報告される。このような場合は、保育士にとって「解決できなかった」ケースとして認識されているだろう。

## D. 考察

以上、本調査では、保育士へのアンケート調査及びインタビュー調査を通して、配慮の必要な保護者への支援プロセスを可視化することで、支援に必要な特徴を明確にすることが目的であった。

アンケート調査からは、

- (1) 保護者の養育態度に課題がある場合と、保護者との何らかのやりとりの中で、保育士の対応や伝え方に問題があること
- (2) それが原因となり、保護者とのこじれた関係性が長期化し話し合い回数も増えること
- (3) 関係性が解決にいたるには長期に渡ること解決したと感じた場合でも時間の経過による消極的な解決の場合が多く、解決に至らないことも2割程度あること

という3点が明らかとなり、それらを踏まえたインタビュー調査からは、保護者と保育士の齟齬が認識のずれを生み出し、それが長期化するプロセスが明らかになった。

以上のことから、以下の示唆が得られた。第一に、保育士と保護者との齟齬が生じた場合の最初の対応を丁寧に行うことが必要である。

第二に、長期化に至ると、肯定的な関係構築に基づく解決もあるが、そうではない消極的な関係構築に基づく解決や未解決となることも約20%程度ある。これらの事例は少数となるが、これが保育士へのストレスを高め退職に向かわせることとなるため、組織的な対応や外部との連携による支援が必要である。

## E. 結論

配慮や支援の必要な保護者への保護者支援は、多くの保育士にとって長いキャリアの中での数少ない事例である。しかしながら、そのような場合で困難さを感じるような状況となった場合、対応の長期化や保育士への高いストレスが見込まれ、負担となる。このような長期化・高ストレス化させないためには、初期段階における丁寧な対応、中期段階における組織的対応、後期段階における外部連携対応といったものが必要となる。

今後、得られたデータのより丁寧な分析や他職種へのインタビューデータなどを複合的に組み込むことで、さらに丁寧に検証したい。

## 引用文献

- 伊藤 優 (2017). 「食事の連絡帳」を媒介とした保育者による保護者支援:一遊び食べや好き嫌いが激しい1歳半の男児Yの事例から一. 日本家政学会誌, 68(11), 609-620. <https://doi.org/10.11428/jhej.68.609>.
- 岸本 美紀・武藤 久枝 (2019). 保護者支援の困難感に関する保育者への面接調査の分析. 現代教育学研究紀要(13), 25-32. Retrieved from <https://ci.nii.ac.jp/naid/120006846309/>.
- 岩切 裕美・若宮 邦彦 (2020). 保育者のバーンアウトとスーパービジョンに関する研究. 保育ソーシャルワーク学研究 = Journal of the Japan Association of Research on Child Care Social Work(6), 31-45. Retrieved from

<https://ci.nii.ac.jp/naid/4002273484>  
4/.

高橋 真由美 (2015). 保育所における保護者  
支援研究の現代的課題. 藤女子大学  
QOL 研究所紀要, 10(1), 141-146.  
Retrieved from  
<https://ci.nii.ac.jp/naid/1200058404>  
61/.

赤塚 徳子・祢宜 佐統美 (2020). 保育所・幼  
稚園における保護者支援に関する研  
究：就園児の保護者と保育者の実態  
調査. 研究紀要 = Bulletin of Aichi  
Bunkyo Women's College(41), 17-28.  
Retrieved from  
<https://ci.nii.ac.jp/naid/4002223734>  
2/.

安田裕子・サトウタツヤ 2017 TEM でひ  
ろがる社会実装 誠信書房

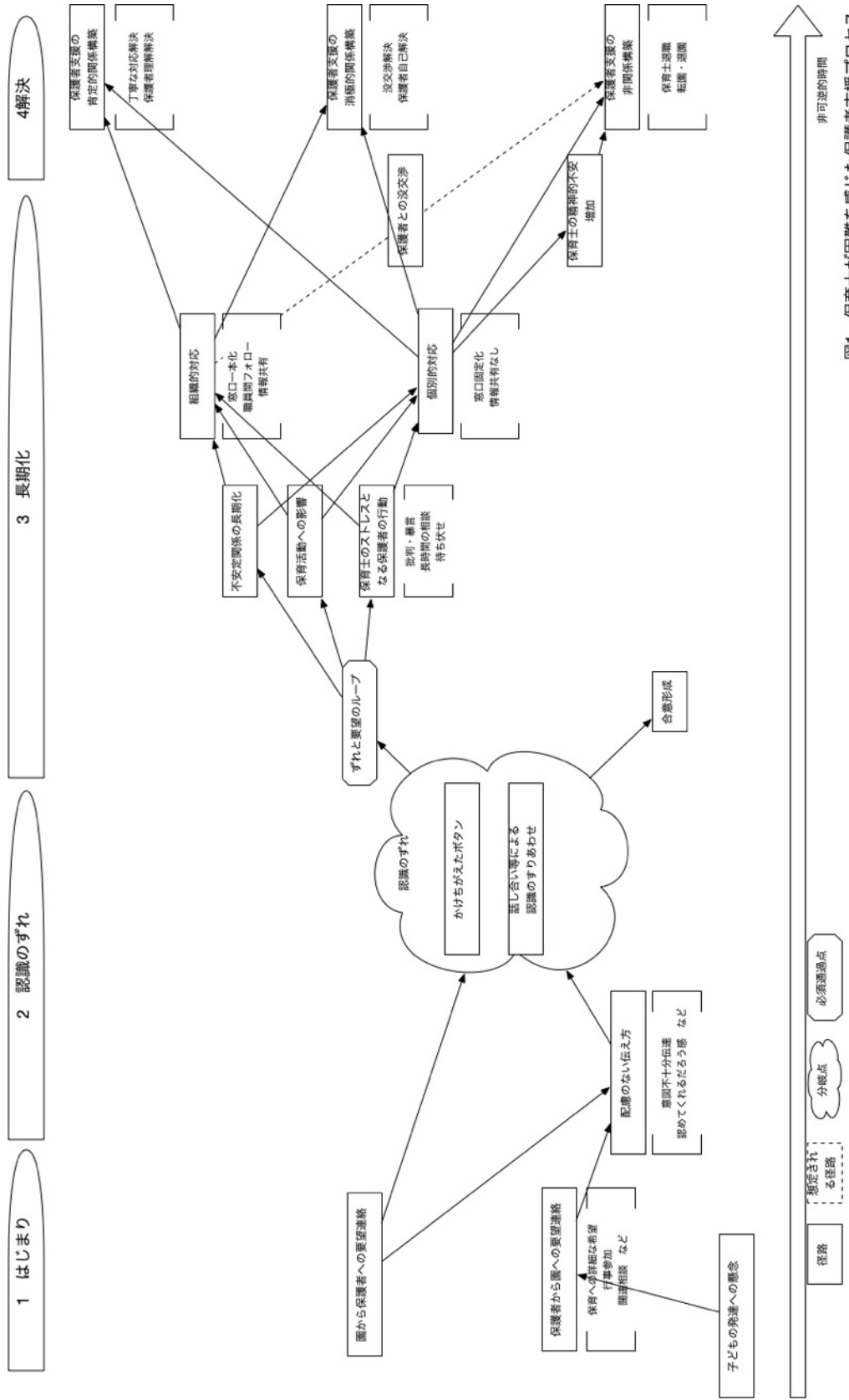


図1 保育士が困難を感じた保護者支援プロセス

厚生労働省科学研究費補助金（政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業））  
分担研究報告書

保育所を利用する保護者が感じる保育士への相談について

研究代表者 上田敏丈 名古屋市立大学 大学院人間文化研究科 教授  
分担研究者 勝浦真仁 桜花学園大学 保育学部 准教授

研究要旨

本調査は、保育所を利用する保護者が、保育士に対して相談を行う際の満足度や使用しているツールについて、アンケート調査から明らかにする。アンケートは、2022年2月～2022年4月まで実施された。協力者は、117名である。

調査の結果、保護者の保育士への相談については、おおむね保育所や保育士が適切に対応しており、80%以上が相談しやすく、その問題が解決されている、と感じていることが明らかになった。しかしながら、相談しにくいと感じたり、相談した内容が解消されていないと感じている人が、1-2割いることから、これらの層に対して、適切に対応していくことが肝要であろう。

A.研究目的

本調査は、保育所を利用する保護者が、保育士に対して相談を行う際の満足度や使用しているツールについて、アンケート調査から明らかにする。

審査委員会の承認を得ている。また、実際に調査を行う際には、牌畏怖先の所属機関との事前協議の上、内諾を頂き、拒否・無回答しても何の不利益もないことを確認した上で、依頼を行った。

B.研究方法

アンケートは、2022年2月～2022年4月まで実施された。アンケート協力者は、A県の複数市町村の当該部局に依頼を行い、各保育所に配布をしてもらった。その後、研究目的に同意したもののみ、web経由でアンケート調査を実施した。協力者は、117名である。

本研究を行うにあたり、アンケート調査については、研究者間で項目の精選・確認を行い、筆頭著者の所属する大学において、倫理

C.研究結果

アンケートによる基礎集計は次の通りである。

①回答者の属性（フェースシート）

本調査の協力者117名の内、そのほとんどは女性であり、年代も30代が中心となっていた。

1-1あなたの性別を教えてください。					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
女性	105	89.74	105	90.52	90.52
男性	10	8.55	10	8.62	99.14
その他	1	0.85	1	0.86	100.00
欠損値	1	0.85			
合計	117	100	116	100	

1-2 あなたの年齢を教えてください。					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
20代	10	8.55	10	8.62	8.62
30代	76	64.96	76	65.52	74.14
40代	29	24.79	29	25.00	99.14
50代	1	0.85	1	0.86	100.00
欠損値	1	0.85			
合計	117	100	116	100	

利用している保育所の種別は、私立保育所が約 43%、公立が約 31%となっていた。

1-4 あなたが利用している園について教えてください。					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
公立	37	31.62	37	31.62	31.62
私立	51	43.59	51	43.59	75.21
認定	23	19.66	23	19.66	94.87
小規模	3	2.56	3	2.56	97.44
認証	3	2.56	3	2.56	100.00
欠損値	0	0.00			
合計	117	100	117	100	

保護者が保育所(保育士)に相談したい内容について、中心となっていたのは、子どもの生活についてが約 56%であり、半数以上を占めていた。また、子どもの発達についてが、約 21%となっており、概ねこの両者が相談内容の中心事項といえよう。

2-1 あなたが保育所(保育士)に何かを相談された内容は、どのようなものだったでしょうか？最もよく覚えていることについて、教えてください。					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
子ども	25	21.37	25	21.74	21.74
行事等	9	7.69	9	7.83	29.57
生活	66	56.41	66	57.39	86.96
対応	3	2.56	3	2.61	89.57
他の保護者	2	1.71	2	1.74	91.30
その他	10	8.55	10	8.70	100.00
欠損値	2	1.71			
合計	117	100	115	100	

保護者が感じる保育士への相談のしやすさは、とても相談しやすい(4)が約 50%、相談しやすい(3)が 40%と、90%以上が保育士への相談のしやすさを感じている。しかしながら、約 10%が保育士への相談のしにくさを感じていることも明らかになった。

2-3_保育所や保育士への相談のしやすさはどの程度でしょうか。					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
1	2	1.71	2	1.72	1.72
2	9	7.69	9	7.76	9.48
3	47	40.17	47	40.52	50.00
4	58	49.57	58	50.00	100.00
欠損値	1	0.85			
合計	117	100	116	100	

このような相談のしやすさ、あるいはしにくさはどこに起因しているのか、という理由を尋ねたところ、保育所や保育士が相談しやすい(あるいはしにくい)という回答が約 82%であった。このことは、対人関係による日頃の関係性の構築が重要であることが推測される。

2-4_上記の理由について最も当てはまるものを1つ選んでください。					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
所・士に相談	96	82.05	96	85.71	85.71
制度的窓口	2	1.71	2	1.79	87.50
他者	5	4.27	5	4.46	91.96
相談しない	4	3.42	4	3.57	95.54
その他	5	4.27	5	4.46	100.00
欠損値	5	4.27			
合計	117	100	112	100	

保護者が保育所や保育士へどのような媒体で相談しているのかについて尋ねた。

送迎時の会話では、約 80%以上が、よくとれている、ほどほどにとれている、と回答している。

3-1_保育所や保育士への相談は主としてどのような方法で行いますか？あわせて、どれくらいコミュニケーションがとれていると感じているでしょうか？(送迎時の会話)					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
よくとれている	39	33.33	39	33.62	33.62
ほどほどに	57	48.72	57	49.14	82.76
どちらともいえない	5	4.27	5	4.31	87.07
あまりとれていない	14	11.97	14	12.07	99.14
全くとれていない	1	0.85	1	0.86	100.00
欠損値	1	0.85			
合計	117	100	116	100	

連絡帳を使用したコミュニケーションでは、約 58%がよく、ほどほどにとれている

と回答している。

3-1_保育所や保育士への相談は主としてどのような方法で行いますか？あわせて、どれくらいコミュニケーションがとれていると感じているでしょうか？_【連絡帳】					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
よくとれている	33	28.21	33	28.70	28.70
ほどほどに	36	30.77	36	31.30	60.00
どちらともいえない	15	12.82	15	13.04	73.04
あまりとれていない	17	14.53	17	14.78	87.83
全くとれていない	4	3.42	4	3.48	91.30
使わない	10	8.55	10	8.70	100.00
欠損値	2	1.71			
合計	117	100	115	100	

園で利用しているツール、Line や電話など、園での相談窓口については、約 20%は使用していないと回答し、全体的にも、あまりとれていない、全くとれていないと回答しているものが多かった。

3-1_保育所や保育士への相談は主としてどのような方法で行いますか？あわせて、どれくらいコミュニケーションがとれていると感じているでしょうか？_【園で使用されている】					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
よくとれている	6	5.13	6	5.22	5.22
ほどほどに	12	10.26	12	10.43	15.65
どちらともいえない	17	14.53	17	14.78	30.43
あまりとれていない	36	30.77	36	31.30	61.74
全くとれていない	11	9.40	11	9.57	71.30
使わない	33	28.21	33	28.70	100.00
欠損値	2	1.71			
合計	117	100	115	100	

3-1_保育所や保育士への相談は主としてどのような方法で行いますか？あわせて、どれくらいコミュニケーションがとれていると感じているでしょうか？_【Lineや電話など】					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
よくとれている	4	3.42	4	3.42	3.42
ほどほどに	15	12.82	15	12.82	16.24
どちらともいえない	12	10.26	12	10.26	26.50
あまりとれていない	52	44.44	52	44.44	70.94
全くとれていない	10	8.55	10	8.55	79.49
使わない	24	20.51	24	20.51	100.00
欠損値	0	0.00			
合計	117	100	117	100	

3-1_保育所や保育士への相談は主としてどのような方法で行いますか？あわせて、どれくらいコミュニケーションがとれていると感じているでしょうか？_【園の相談窓口】					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
よくとれている	2	1.71	2	1.72	1.72
ほどほどに	12	10.26	12	10.34	12.07
どちらともいえない	24	20.51	24	20.69	32.76
あまりとれていない	38	32.48	38	32.76	65.52
全くとれていない	8	6.84	8	6.90	72.41
使わない	32	27.35	32	27.59	100.00
欠損値	1	0.85			
合計	117	100	116	100	

市役所や区役所を通してにいても、使用していないが約 30%であり、どちらともいえない、とれてない、全くとれていないで、60%を超えることから、ほとんどがこうした連絡手段を用いることはないといえよう。

3-1_保育所や保育士への相談は主としてどのような方法で行いますか？あわせて、どれくらいコミュニケーションがとれていると感じているでしょうか？_【市役所や区役所を】					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
よくとれている	3	2.56	3	2.56	2.56
ほどほどに	4	3.42	4	3.42	5.98
どちらともいえない	17	14.53	17	14.53	20.51
あまりとれていない	43	36.75	43	36.75	57.26
全くとれていない	14	11.97	14	11.97	69.23
使わない	36	30.77	36	30.77	100.00
欠損値	0	0.00			
合計	117	100	117	100	

保護者が行う相談内容について、相談することで解消されるかどうかを尋ねたところ、約 82%が解消される、やや解消されると回答していることから、保育所や保育士が適切に対応していることが読み取れる。

また、解消されない場合、パートナーや両親、友人への相談が多く、他の専門家に尋ねることは少ないことも明らかになった。

3-2_保育所や保育士へ相談したことで、あなたが感じている相談内容は解消されることが多いでしょうか？					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
1	5	4.27	5	4.35	4.35
2	14	11.97	14	12.17	16.52
3	48	41.03	48	41.74	58.26
4	48	41.03	48	41.74	100.00
欠損値	2	1.71			
合計	117	100	115	100	

3-3_上記で解消されないものがあつたとき、どのように対応されるでしょうか？最もよく行うもの一つを選んでください。					
出現値	度数	確率(%)	有効度数	有効確率	累積確率
パートナーに	58	49.57	58	51.33	51.33
両親に	12	10.26	12	10.62	61.95
専門機関等に	10	8.55	10	8.85	70.80
役所に	4	3.42	4	3.54	74.34
友人に	17	14.53	17	15.04	89.38
その他	8	6.84	8	7.08	96.46
7	4	3.42	4	3.54	100.00
欠損値	4	3.42			
合計	117	100	113	100	

#### **D.考察**

以上のことから、保護者の保育士への相談については、おおむね保育所や保育士が適切に対応しており、80%以上が相談しやすく、その問題が解決されている、と感じていることが明らかになった。しかしながら、相談しにくいと感じたり、相談した内容が解消されていないと感じている人が、1-2割いることから、これらの層に対して、適切に対応していくことが肝要であろう。

#### **E.結論**

保護者の保育所・保育士への相談は、概ねしやすいと感じている。今後、そのほかのデータと含めて検討することで、詳細な分析を行いたい。



厚生労働省科学研究費補助金（政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業））  
分担研究報告書

F-SOAIP を用いた記録システム(パイロット版)

研究代表者 上田敏丈 名古屋市立大学 大学院人間文化研究科 教授  
分担研究者 小嶋章吾 国際医療福祉大学 医療福祉学部 教授  
分担研究者 畠末憲子 埼玉県立大学 保健医療福祉学部 准教授  
研究協力者 中村聖子 大倉山元気の泉保育園 園長

研究要旨

本研究は、配慮や支援の必要な保護者の情報を共有するツール（パイロット版）を作成することである。

そのために、

(1)F-SOAIP を保育記録へ援用し有用性を検討すること（詳細は別紙資料）

(2)具体的菜データベースの構築すること

という2点を行った。

(1)保育記録への有用性の検討

本研究により、保育の記録に F-SOAIP を援用する有用性として、①項目による書きやすさ・教えやすさ、②実践の変化につながる「保育の循環的な過程」の意識化保育の循環的な過程のやりやすさ、③意図や願いを共有するという記録の意義の再認識の3点が明らかになった。

(2)F-SOAIP を用いた記録システムの作成

F-SOAIP に基づく記録システムの開発を行った。

A.研究目的

本研究は、配慮や支援の必要な保護者の情報を共有するツール（パイロット版）を作成することである。

そのために、

(1)F-SOAIP を保育記録へ援用し有用性を検討すること（詳細は別紙資料）

(2)具体的菜データベースの構築すること

という2点を行う。

F-SOAIP とは、医療・福祉領域において活用実績のある項目形式の経過記録法の一つであり、F-SOAIP 公式 HP によれば、「多職種協働によるミクロ・メゾ・マクロレベルの実践過程において、生活モデルの観点から、当事者ニーズや観察、支援の根拠、働きかけと当事者の反応等を、F-SOAIP の項目で可視化し、PDCA サイクルに多面的効果を生むリフレクティブな経過記録の方法

(Ver. 4, 2019 年 11 月)」と定義されている。

F-SOAIP は、次の 6 項目を使用する。① F: Focus (着眼点) ニーズ、気がかり等。タイトルのようにその場面を簡潔に表現する。②S: Subjective Data (主観的情報) 利用者 (キーパーソンを含む) の言葉。③O: Objective Data (客観的情報) 観察・状態や他職種から得られた情報、環境・経過等。④ A: Assessment (アセスメント) 援助者 (記録者本人) の判断・解釈。気づきや考え。⑤ I: Intervention/ Implementation (介入・実施) 援助者 (記録者本人) の対応。支援、声かけ、連絡調整。⑥P: Plan (計画) 当面の対応予定。

## B. 研究方法

### (1) 保育記録への有用性の検討

研究協力園は、横浜市内の認可保育所 O 園であり、研究対象は O 園の保育者 11 名 (主任 1 名, 担任 10 名) である。2021 年 1 月~2021 年 3 月に行った。

## C. 研究結果

### (1) 保育記録への有用性の検討

本研究により、保育の記録に F-SOAIP を採用する有用性として、①項目による書きやすさ・教えやすさ、②3-2. 実践の変化につながる「保育の循環的な過程」の意識化保育の循環的な過程のやりやすさ、③意図や願いを共有するという記録の意義の再認識の 3 点が明らかになった。詳細は別途資料を参照のこと。

### (2) F-SOAIP に基づく記録システムの開発

本記録システムの開発を行うに際して、

①F-SOAIP の項目に基づき簡便に記録が入力できること

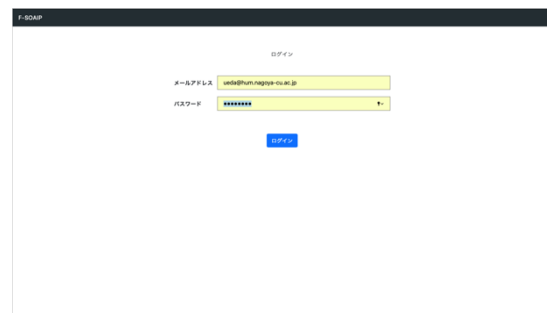
②安全性が担保できていること

③園ごとで活用ができること

④クラス単位・個人単位での視認性を高くすること

を前提として、システム開発を行った。

#### i. ログイン画面



ログイン画面はメールアドレスとパスワードによってログインする。

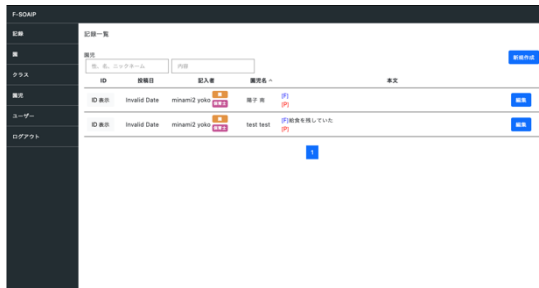
ログインは、個人のスマートフォンに Google Authenticator というアプリを取得し、電話番号と紐付けられたコードを入力することで可能となる。

#### ii. セキュリティ画面



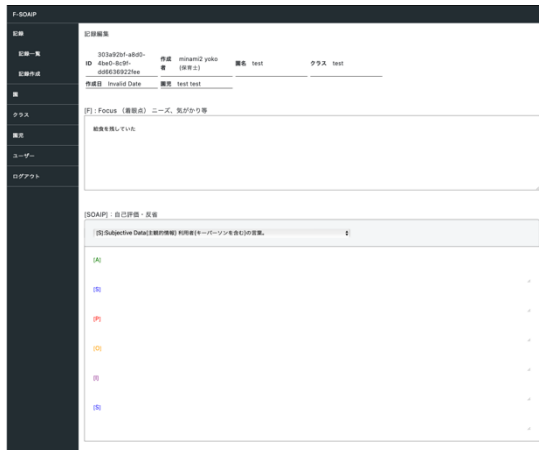
記録の一覧はiiiの通りである（画面はでも画面用のもの）。

### iii 記録一覧画面



記録の入力画面はivである。

### iv 入力画面



入力したデータをソートすることが可能である。

### v 園児一覧



### vi クラス一覧



また、本記録システムを活用するにあたってのマニュアルも作成した。

### vii マニュアル



#### D.考察

研究目的(1)から F-SOAIP の概念を保育記録に援用することで有用性が明らかになった。また、(1)で得られた知見から、(2)の F-SOAIP に基づく記録システムの開発を行うことができた。

今後、データを入力し、それぞれの園で活用した事例を元に、より効果的なシステム ( $\beta$  版) としたい。

研究成果の刊行に関する一覧表

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
勝浦 眞仁・上田 敏 丈	保護者支援における保育士の抱 える困難感のフェーズを探る・ 保育士による保護者支援のため の文献研究.	桜花学園大学保 育学部研究紀要	24	35-50	2021
中村 聖子・上田 敏丈	保育の記録におけるF -SOAIP 援用の有用 性の検討	質的心理学研 究	20	S22-28	2021

厚生労働大臣 殿

機関名 公立大学法人 名古屋市立大学

所属研究機関長 職 名 人間文化研究科長

氏 名 野中 壽子

次の職員の令和3年度厚生労働科学研究費の調査研究における、倫理審査状況及び利益相反等の管理については以下のとおりです。

1. 研究事業名 政策科学推進研究事業
2. 研究課題名 F-SOAIP を用いた特別な支援の必要な保護者対応の記録システムの開発
3. 研究者名 (所属部署・職名) 人間文化研究科・教授  
(氏名・フリガナ) 上田敏丈・ウエダハルトモ

## 4. 倫理審査の状況

	該当性の有無		左記で該当がある場合のみ記入 (※1)		
	有	無	審査済み	審査した機関	未審査 (※2)
人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針 (※3)	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	名古屋市立大学	<input type="checkbox"/>
遺伝子治療等臨床研究に関する指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
厚生労働省の所管する実施機関における動物実験等の実施に関する基本指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
その他、該当する倫理指針があれば記入すること (指針の名称: )	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>

(※1) 当該研究者が当該研究を実施するに当たり遵守すべき倫理指針に関する倫理委員会の審査が済んでいる場合は、「審査済み」にチェックし一部若しくは全部の審査が完了していない場合は、「未審査」にチェックすること。

## その他 (特記事項)

(※2) 未審査に場合は、その理由を記載すること。

(※3) 廃止前の「疫学研究に関する倫理指針」、「臨床研究に関する倫理指針」、「ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針」、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に準拠する場合は、当該項目に記入すること。

## 5. 厚生労働分野の研究活動における不正行為への対応について

研究倫理教育の受講状況	受講 <input checked="" type="checkbox"/> 未受講 <input type="checkbox"/>
-------------	---

## 6. 利益相反の管理

当研究機関におけるCOIの管理に関する規定の策定	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由: )
当研究機関におけるCOI委員会設置の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合は委託先機関: )
当研究に係るCOIについての報告・審査の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由: )
当研究に係るCOIについての指導・管理の有無	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> (有の場合はその内容: )

(留意事項) ・該当する□にチェックを入れること。  
・分担研究者の所属する機関の長も作成すること。

厚生労働大臣 殿

機関名 桜花学園大学

所属研究機関長 職名 学長

氏名 大谷 岳

次の職員の令和3年度厚生労働科学研究費の調査研究における、倫理審査状況及び利益相反等の管理については以下のとおりです。

1. 研究事業名 保育所における個別の配慮や支援を要する保護者等への効果的な子育て支援のための研究
2. 研究課題名 F-SOAP を用いた特別な支援の必要な保護者対応の記録システムの開発
3. 研究者名 (所属部署・職名) 桜花学園大学保育学部保育学科・准教授  
(氏名・フリガナ) 勝浦真仁・カツウラマヒト

4. 倫理審査の状況

	該当性の有無		左記で該当がある場合のみ記入 (※1)		
	有	無	審査済み	審査した機関	未審査 (※2)
人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針 (※3)	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
遺伝子治療等臨床研究に関する指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
厚生労働省の所管する実施機関における動物実験等の実施に関する基本指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
その他、該当する倫理指針があれば記入すること (指針の名称: )	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>

(※1) 当該研究者が当該研究を実施するに当たり遵守すべき倫理指針に関する倫理委員会の審査が済んでいる場合は、「審査済み」にチェックし一部若しくは全部の審査が完了していない場合は、「未審査」にチェックすること。

その他 (特記事項)

(※2) 未審査に場合は、その理由を記載すること。

(※3) 廃止前の「疫学研究に関する倫理指針」、「臨床研究に関する倫理指針」、「ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針」、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に準拠する場合は、当該項目に記入すること。

5. 厚生労働分野の研究活動における不正行為への対応について

研究倫理教育の受講状況	受講 <input checked="" type="checkbox"/> 未受講 <input type="checkbox"/>
-------------	---

6. 利益相反の管理

当研究機関におけるCOIの管理に関する規定の策定	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由: )
当研究機関におけるCOI委員会設置の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合は委託先機関: )
当研究に係るCOIについての報告・審査の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由: )
当研究に係るCOIについての指導・管理の有無	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> (有の場合はその内容: )

(留意事項) ・該当する□にチェックを入れること。  
・分担研究者の所属する機関の長も作成すること。

厚生労働大臣 殿

機関名 国際医療福祉大学

所属研究機関長 職 名 学長

氏 名 大友 邦

次の職員の令和3年度厚生労働科学研究費の調査研究における、倫理審査状況及び利益相反等の管理については以下のとおりです。

- 研究事業名 令和3年度厚生労働科学研究費補助金(政策科学総合研究事業(政策科学推進研究事業))
- 研究課題名 F-SOAIIP を用いた特別な支援の必要な保護者対応の記録システムの開発(21AA1001)
- 研究者名 (所属部署・職名) 医療福祉学部・医療福祉マネジメント学科・教授

(氏名・フリガナ) 小嶋 章吾・コジマ ショウゴ

4. 倫理審査の状況

	該当性の有無		左記で該当がある場合のみ記入 (※1)		
	有	無	審査済み	審査した機関	未審査 (※2)
人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針 (※3)	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
遺伝子治療等臨床研究に関する指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
厚生労働省の所管する実施機関における動物実験等の実施に関する基本指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
その他、該当する倫理指針があれば記入すること (指針の名称: )	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>

(※1) 当該研究者が当該研究を実施するに当たり遵守すべき倫理指針に関する倫理委員会の審査が済んでいる場合は、「審査済み」にチェックし一部若しくは全部の審査が完了していない場合は、「未審査」にチェックすること。

その他 (特記事項)

(※2) 未審査に場合は、その理由を記載すること。

(※3) 廃止前の「疫学研究に関する倫理指針」、「臨床研究に関する倫理指針」、「ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針」、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に準拠する場合は、当該項目に記入すること。

5. 厚生労働分野の研究活動における不正行為への対応について

研究倫理教育の受講状況	受講 <input checked="" type="checkbox"/> 未受講 <input type="checkbox"/>
-------------	---

6. 利益相反の管理

当研究機関におけるCOIの管理に関する規定の策定	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由: )
当研究機関におけるCOI委員会設置の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合は委託先機関: )
当研究に係るCOIについての報告・審査の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由: )
当研究に係るCOIについての指導・管理の有無	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> (有の場合はその内容: )

(留意事項) ・該当する□にチェックを入れること。  
・分担研究者の所属する機関の長も作成すること。



機関名 埼玉県立大学

所属研究機関長 職名 学長

氏名 星 文彦

次の職員の令和3年度厚生労働科学研究費の調査研究における、倫理審査状況及び利益相反等の管理については以下のとおりです。

1. 研究事業名 令和3年度厚生労働科学研究費補助金(政策科学総合研究事業(政策科学推進研究事業))

2. 研究課題名 F-SOAIIP を用いた特別な支援の必要な保護者対応の記録システムの開発

3. 研究者名 (所属部署・職名) 社会福祉子ども学科 准教授

(氏名・フリガナ) 寫末憲子・シマスエノリコ

## 4. 倫理審査の状況

	該当性の有無		左記で該当がある場合のみ記入 (※1)		
	有	無	審査済み	審査した機関	未審査 (※2)
人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針 (※3)	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	名古屋市立大学	<input type="checkbox"/>
遺伝子治療等臨床研究に関する指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
厚生労働省の所管する実施機関における動物実験等の実施に関する基本指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
その他、該当する倫理指針があれば記入すること (指針の名称: )	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>

(※1) 当該研究者が当該研究を実施するに当たり遵守すべき倫理指針に関する倫理委員会の審査が済んでいる場合は、「審査済み」にチェックし一部若しくは全部の審査が完了していない場合は、「未審査」にチェックすること。

その他 (特記事項)

(※2) 未審査の場合は、その理由を記載すること。

(※3) 廃止前の「疫学研究に関する倫理指針」、「臨床研究に関する倫理指針」、「ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針」、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に準拠する場合は、当該項目に記入すること。

## 5. 厚生労働分野の研究活動における不正行為への対応について

研究倫理教育の受講状況	受講 <input checked="" type="checkbox"/> 未受講 <input type="checkbox"/>
-------------	---

## 6. 利益相反の管理

当研究機関におけるCOIの管理に関する規定の策定	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由: )
当研究機関におけるCOI委員会設置の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合は委託先機関: )
当研究に係るCOIについての報告・審査の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由: )
当研究に係るCOIについての指導・管理の有無	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> (有の場合はその内容: )

(留意事項) ・該当する□にチェックを入れること。  
・分担研究者の所属する機関の長も作成すること。